

第21回

函館港イルミネーション映画祭
第19回シナリオ大賞

準グランプリ

ブリキの ジープ

2015

太田 野歩





【作者プロフィール】

おおた のつぽ

本名、太田弘一。東京都出身、千葉県在住、61歳。

2011年に34年間勤めた電気メーカーを退職後フリー。

2013年第19回函館港イルミネーション映画祭・第17回シナリオ大賞で準グランプリ受賞。（作品名「たこ」）

【あらすじ】

昭和二十年八月十五日、戦争は終わった。

その日から戦後と言われる時代が始まり、今年で七十年の年月を経たが、当時の巷の人々は、「終戦」をどの様に受け止め、どの様に生きたのであろうか。そんな事に想いを馳せてこの物語を書いてみた。

同年十月四日には、函館にも連合国軍が進駐してきた。函館の人々は、トラックやジープを連ねて進駐してくる連合国の兵隊達を、どんな気持ちで眺めていたのであろうか。この物語は、進駐軍が函館に進駐してきた日から始まる。

主人公は、将太という当時十歳の少年。

将太を通して、進駐軍が進駐してきた日か

ら四ヶ月間の終戦直後の函館を描く。

育ちざかりの将太は、毎日朝から晩まで腹が減って腹が減ってどうしようもなかった。将太は、少しでも旨い物を腹一杯食べるにはどうしたら良いか、そればかりを考えていた。そんな将太の周りで、いろいろな事件が起こる。それを、できる限り将太の目線で捉えて描こうと思う。

またこの物語の中には、将太が食べる当時の食べ物がいくつか出て来る。

「茹でたジャガイモ」「少しばかりの野菜が入った雑炊」「残飯シチュー」「母ちゃんの作ったイカ飯」「ナマズの蒲焼」、その一つ一つを、食べた時の将太の気持ちだけでなく、匂い、味、まで感じられるように描ければ、と思う。

体験者では無いので、あくまで想像の域を出ないが、終戦直後の函館の街の空気、匂い、そして人々の生活と息遣いを描くことは、「終戦」、そして「戦争」を考える一助になると思っている。

【登場人物】

経澤将太	十歳		若い衆	二十三歳	福田組組員
経澤久美子	四十二歳	将太の母	剛の母親	五十歳	
経澤雅恵	十八歳	将太の姉	現代の将太	八十歳	
辰次	十歳	将太の親友	祐太	五歳	将太の孫
辰次の母親（声）	三十二歳		農家の男		
辰次の父親（声）	三十五歳		傷痍軍人		
剛	二十歳	雅恵の許嫁	靴泥棒		
留蔵	三十八歳	ブリキ細工人	靴の露天商		
高田義男	三十歳	船員	ブローカー		
福田組組長	五十五歳	的屋の親分	解放区の用心棒		
警察署長	五十歳		倉庫襲撃者		
畳屋の爺さん	六十五歳	隣家の住人	巡査 A		
小学校の教師	四十歳	将太の担任	巡査 B		
生徒	十歳	将太の級友			

昭和二十年八月十五日 函館

○神社の境内

白布が掛られた机が拝殿に置かれ、机の上にラジオが置かれている。

ラジオから玉音放送が流れている。

十数人が、拝殿前の地べたに正座して聴いている。

多くの人がそれを囲むようにして聴いている。

雑音が酷く聞き取りづらい。

ナレーション（将太の声）

「天皇陛下のお声は、雑音で良く聞こえなかった。聞こえた部分も、難しくて良く解らなかった。戦争が終わったらしい。泣いている人も、笑っている人も居る。」

戦争が終わると、どうなるんだろう・・・判らん」

○波止場の棧橋

将太と辰次が、海に釣り糸を垂らして蟹獲りをしている。

将太は、糸の端を握ったまま棧橋の上に大の字に寝転び、青空の中を飛んで行く飛行機を眺めている。

ナレーション（将太の声）

「戦争は終わった。もう、頭の上から爆弾や焼夷弾が降ってくる事は無い。飛行機が飛んで来ても、機銃掃射される事も無い。こうして、ぼんやり飛行機を眺めていても、良いのである」

辰次「将ちゃん、引いてるよ」

将太は慌てて起き上がると、釣り糸を慎重に手繰る。

釣り糸の先に、餌の烏賊の足を鋏でガッチリ挟んだ蟹がぶら下がっている。

将太は、ゆっくり蟹を釣り上げる。

隣で辰次も同じ様に蟹を釣り上げる。

二人の満足そうな笑顔。

○メインタイトル 『ブリキのジープ』

昭和二十年十月四日 函館

○街路

進駐軍の兵隊を満載したトラックや、将校の乗ったジープが連なって、街

路を次々と走り抜けて行く。

それを、恐る恐る眺めている沿道の人々。

眺めている人垣の間から、将太と辰次が顔を出す。

ナレーション（将太の声）

「進駐軍が函館にやって来た。進駐軍の兵隊は恐ろしくデカイ。これからは、奴らの奴隷にされてしまうのだろうか・・・しかし進駐軍の兵隊は、日本の兵隊さんとは全く違う。きちんと整列して行進しないし、ニコニコ笑っている兵隊がたくさんいる」

将太「腹減ったなあ、辰ちゃんもう帰ろうか」
辰次「うん」

将太と辰次は、人垣を掻き分けて裏

道に駆けて行く。

○倉庫街

剛が、闇市の的屋である福田組の若い衆達と、倉庫の前で屯っている。

若い衆達は、揃いの半纏を着ている。

剛だけ飛行服に白いマフラー姿で、軍刀を肩に担いでいる。

将太と辰次が駆けて来る。

将太が剛に気付き、剛の傍に駆け寄る。

剛は笑いながら将太に声をかける。

剛「おう、将太じゃないか、生きてたか」

将太「いつ帰って来たの」

剛「一昨日だ、進駐軍より先に函館ご帰還だ」

将太「零戦乗ってたんだろ」

剛「まあな」

将太「零戦は無敵だろ、なんで日本は負けちゃったんだ」

福田組の若い衆が笑い、剛も笑いながら、

剛「零戦一機にグラマン十機じゃ、さすがの零戦も敵わんさ」

将太「ねえ、零戦の話、聞かせてよ」

剛「いつかそのうちな」

将太「ここで何してるの」

剛「戦争だ、この倉庫の中の物を守ってる」

福田組の若い衆の一人が笑いながら、

若い衆「おい聞いたか、戦争だよ。用心棒じゃなかったのかい。確かにこいつは、いまだに飛行服なんか着てやがらあ」

福田組の若い衆が皆笑う。

将太「進駐軍がここに攻めてくるの」

剛「相手は進駐軍じゃない。炭鉱や港に居た朝鮮人や中国人が、暴動起こして攻めてくるかもしれん」

将太と辰次は顔を見合わせて、

将太「へえ」

剛「雅恵は元気か」

将太「うん、元気だ。姉ちゃん心配してたよ」

剛「父ちゃん帰って来たか」

将太「まだ帰って来ない。姉ちゃんに会いに来ないんか」

剛「父ちゃんが帰って来たら、もらいに行くって、雅恵に言つといてくれ」

将太「うん、わかった」

将太と辰次は駆け出して行く。

○将太の家 外

雨戸が全て閉められている。

玄関の表札の横に、『かけはぎ、仕立て直し、なんでもします』という張り紙。

将太が、そっと扉を開けて家の中に入る。

○将太の家 中

扉を入ってすぐ土間が在り、土間に面して六畳の居間、その奥に襖で仕切られたもう一つの六畳の部屋が在る。

土間の奥が台所になっている。

○同 居間

母の久美子が裁縫仕事をしている。

久美子は、将太が帰って来たのに氣付き、

久美子「どこ行つてたの。今日は外に出ちゃだめだつて言つたでしょ」

○同 台所

将太が来て、戸棚を開ける。

将太「腹減つた」

久美子の声「なんにも無いよ、夕飯まで我慢おし」

将太は仕方なく奥の部屋に行く。

○同 奥の部屋

姉の雅恵が布団を被つて寝ている。

○同 土間

玄關の扉が開いて、隣の畳屋の爺さんが訪ねて来る。

爺さん「久美子さん、居るかい」

○同 居間

久美子「はい」

久美子は返事をするが、裁縫仕事の手は止めない。

爺さんは勝手知つた様に入つて来て、居間の端に腰かけて、

爺さん「進駐軍を見て来たよ。奴ら化け物みたいに身体が大きい。あんなのと戦つてたんだねえ。・・・勝てるわきやないよ」

将太は、奥の部屋から居間を覗いている。

久美子「沢山人出てました？」

爺さん「思ったより出ていたよ。怖い物見たさは、皆一緒なんだね」

久美子「これから、どうなるんでしょうねえ」

爺さん「さあ、判らんが、庶民に危害を加える事は有りますまい。まあ、戸締りきちんとして、夜は出かけん事だね」

久美子は笑いながら、

久美子「怖いから、ずっと雨戸を閉めきつてますよ」

爺さん「それがいい。・・・そうそう、剛が帰って来てるね、倉庫の前で見かけたよ」

久美子「えっ、予科練行った剛さんが、・・・特攻せずに済んだのね、よかったわねえ」

久美子と爺さんの会話を布団の中で聞いていた雅恵が、居間に飛び出し

てくる。

雅恵「剛さん帰って来たの、ねえもつと詳しく聞かせて」

爺さんは驚いて、

爺さん「いやね、倉庫の前で福田組の若い衆と屯ってるのを見かけたんだが、飛行服着て、白いマフラーなんか巻いちやつて、えらく格好つけてたよ」

雅恵「倉庫の前、いつ？」

爺さん「今帰って来る時だよ」

雅恵は奥の部屋に跳んで行く。

爺さん「剛の出征の日、覚えてるか。目をガラガラさせて・・・あれから一年余りなのに変わるもんだよ」

久美子「変わったって、どんなにですか」

爺さん「大人になったと言うか、擦れたと

言うか、やくざみたいだったよ。色々あったんだろうねえ」

久美子「この戦争の中、生きて帰って来たんですから・・・」

爺さん「そうだね、生きて帰って来れたんだからね・・・」

久美子「そりや、色々ありますよ」

爺さん「そうそう明日の配給、また欠配だつてさ」

久美子「えっ、またですか。もう食べる物有りやしませんよ。どうしよう」

爺さん「イモならまだ少し有るよ。あんたの所と違って、うちは婆さんと二人だから」

久美子「いつもすいません。またお借りするかもしれません」

爺さん「まあ、気にせんで。隣どうしだ、助け合わんと」

爺さんは、土間に脱ぎ捨てられていた将太の靴を揃えようと拾い上げる。
将太の靴は、半分底が剥がれて前が口を開けている。

爺さん「あれまあ、口が開いてパカパカだ」

久美子「もう買い換えてやらなきゃならないんですが、なかなか・・・」

爺さん「いつまでもつか判らんが、また縫い付けておくよ」

爺さんは、将太の靴を持って出て行く。

久美子は手仕事を止めずに爺さんの背に向かって、

久美子「いつもすいません」

○同 奥の部屋

雅恵が着替えて、鏡台に向つて化粧をしている。

将太がそれを眺めながら、

将太「姉ちゃん、出掛けるんか」

雅恵は答えず、化粧を終えると出て行く。

○同 土間

雅恵が靴を履いて出て行くとする。

久美子が雅恵に向かつて、

久美子「こんな日に、どこ行くのよ」

雅恵は答えずに出て行くとする。

久美子は慌てて立ち上がり、雅恵を扉の所まで追って行き、雅恵の肩をつかんで、

久美子「街中進駐軍だらけなのよ。若い娘

がうろついてたら、何されるか判んないでしょ。今日は外に出ちゃだめ」

雅恵は久美子の制止を振り切つて、

雅恵「剛さんに会つて来る」

雅恵は、扉から駆け出て行く。

久美子も雅恵を追つて外に出るが、

雅恵は駆けて行つてしまい、久美子は啞然と雅恵を見送る。

○同 居間 夜

小さな卓袱台で、将太と久美子が夕飯を食べている。

夕飯は、少しばかりの野菜が入った雑炊。

将太は、あつという間に自分の分を

食べ終えて、お代りを欲しそうに卓

袱台の上の鍋の蓋を開けて覗く。

久美子が、将太の手を叩く。

将太は、久美子の顔を恨めしそうに見る。

久美子は自分の分を食べ終えて、慌
ただしく立ち上がり、

久美子「母ちゃん、ちょっと雅恵を探して
くるからね。ちゃんと留守番してるんだ
よ。残りは雅恵の分だからね、食べちゃ
だめよ」

将太は、鍋をじつと睨んでいる。

久美子は、箆笥から風呂敷を出して、
頭巾の様に被る。

○同 玄関 夜

久美子は、扉を開けて外の様子を窺
つてから、恐る恐る外に出て行く。

○街路 夜

久美子が辺りを気にしながら泥棒の
様に歩いて来る。

表通りの角には、自動小銃を持った
MPが立って警戒している。

街路には人影が全く無く、家々は皆
雨戸を閉めている。

久美子はMPに見つからないように、
家影に身を隠しながら裏道を急ぎ足
で歩いて行く。

久美子が角を曲がろうとした時、酔
った進駐軍の兵隊二人と鉢合わせに

なる。

久美子「ぎゃっ」

久美子は叫んで、来た道を一目散に走って逃げ戻る。

進駐軍の兵隊が何か大声で叫んだ後、

大笑いしている声が聞こえる。

久美子は必死に走る。

○将太の家 土間 夜

血相を変えた久美子が、扉から飛び込んで来る。

久美子は、慌てて扉に鍵を掛け、土間にあった箸を扉の心張棒として差し込む。

久美子は大きく息を吐き、その場へたり込む。

将太が居間から久美子に声をかける。

将太の声「姉ちゃん帰って来ないんか、なら、これ食べてもいいだろ」

久美子は、荒い息を吐きながら、へたり込んだまま、返事をしない。

久美子は、よろよろ立ち上がって、扉の傍で耳をそばだてて外の様子を窺う。

○同 居間 夜

将太は鍋の蓋を開け、残っていた雑炊を自分の茶碗によそってがつがつ食べ、雑炊を全部たいらげる。

将太「母ちゃん、全部食べちゃったよ」

久美子が、少し安心した顔つきで居間に上がって来て、将太の頭をこつ

んと叩き、

久美子「早く寝なさい」

久美子は、卓袱台の食器を片付け始める。

○同 奥の部屋 夜

将太は、押し入れから布団を出して敷き、布団の上に寝転がってノラク口を読み始める。

隣の居間から久美子が、

久美子の声「電気消して、早く寝なさい」

将太は、電気を消して襖をそつと少し開け、居間を覗く。

居間で久美子が裁縫仕事をしているのが見える。

ナレーション（将太の声）

「その晩、母ちゃんは寝ないで姉ちゃんを待ってたが、姉ちゃんは帰って来なかった」

○将太の家 外 朝

青空が広がる清々しい朝。

将太の家の雨戸が開き、久美子が用心深くそつと顔を出し、辺りの様子を窺う。

久美子は、普段と変わらぬ様子を確認すると、大きく伸びをして雨戸を閉める。

○同 中 奥の部屋

久美子は、布団に包まって寝ている将太を起こして、

久美子「ほら朝よ、早く起きなさい。今日も学校あるんでしょ」

○同 台所

久美子が険しい顔をして台所に下りて来て、包丁を手にして身構える。

将太も、久美子の後ろに隠れる。

扉の向こうから雅恵の声がする。

雅恵の声「母さん、あたしよ、開けて」

久美子は包丁をしまつて、土間に行く。

○同 土間

久美子が、心張棒を外して鍵を開けると、雅恵が扉を開けて入って来る。

久美子「どこほつつき歩いてたの、この親

不孝者が・・・」

久美子は涙ぐみながら、雅恵の背を何度も叩く。

久美子「顔洗ってから」

将太は、台所に顔を洗いに行く。

久美子「朝は大きいのを食べて、残りは弁当箱に入れて持つて行くのよ、いいかい」

玄関の扉が、外から何度も叩かれる。

○同 居間
久美子は、裁縫仕事をしている。

寝ぼけ顔で将太が来る。

卓袱台に、茹でたジャガイモを盛つた皿がある。

将太は、ジャガイモを食べようとする。

雅恵が久美子に向き合つて、

雅恵「母さんごめん、剛の所に居たの。今日から、剛と一緒に暮らすわ。心配しないで」

久美子「何勝手な事言つてんの。母さんそんな事許さないからね」

雅恵「私、剛さんが帰つて来るの、ずっと待つてたのよ。母さんも知つてるでしょ」

久美子「あんた、自分のしてる事がどんな事だか解つてゐるのかい。嫁入り前の娘が、男の所に転がり込むなんて・・・」

久美子は手で顔を覆つて泣き出す。

○同 居間

将太は、ジャガイモを食べながら二人の言い争いを見ている。

○同 土間

雅恵と久美子に向き合つて言い争う。

雅恵「剛さんは許嫁なのよ、戦争から元気に帰つて来たのよ。私、ずっと祈つてたんだから・・・もう待てないわ」

久美子「許嫁つて言つたつて、・・・父ちゃん、まだ帰つてないし・・・嫁に行くにしたつて、父ちゃん帰つて来て、ちゃんとしてからでなきゃ・・・」

雅恵「父さんも許してくれたから許嫁なんでしょ。それに父さんいつ帰つてくるかわからないわ。帰つて来ないかもしれないでしょ」

久美子「何て事言うの」

久美子は、雅恵の頬を平手で叩く。

○同 居間

雅恵は叩かれた頬を押さえて、居間に駆け上がり、奥の部屋に飛び込む。久美子も居間に上がり、しゃがみこんで畳を拳で何度も叩く。

久美子「こんな時に父ちゃんが居れば・・・」

○同 奥の部屋

雅恵は、押し入れから自分の私物や着替えを取り出して荷造りをしている。

将太が、ズック鞆を取りに来る。

将太「姉ちゃん、出てくんか」

雅恵は答えない。

○同 居間

将太が皿の上に残ったジャガイモを弁当箱に詰め、ズック鞆に入れる。久美子は、蹲つて泣いたまま。

○同 土間

将太は、その場から逃げるように出て行こうとするが、靴が無いのに気付き、裸足のまま扉を開けて出て行く。

○畳屋の店先 朝

爺さんはもう店を開けていて、土間で仕事をしている。

裸足の将太が駆け込んで来る。

爺さんは将太に気付き、修理した靴

を取つて来て将太に差し出す。

爺さん「一応縫い付けておいたが、きつとすぐまた壊れるよ。もうボロボロだから、新しいの買ってもらいな」

将太は靴を履いてみる。

爺さん「どうだ」

将太「うん」

将太は爺さんに向かってにつこり笑い、店先から駈け出して行く。

○辰次の家 朝

将太が街路を駆けて来て、辰次家の勝手口の扉を開けて中を覗く。

奥の部屋で辰次が子守をしているのが見える。

将太は奥の部屋に向かって声をかけ

る。

将太「おい」

辰次は将太に気付いて、赤ん坊を背から降ろして布団に寝かせ、出て来る。

奥から辰次の母親の怒鳴り声がする。

辰次の母親の声「こら辰次、どこ行くの。

今日は学校休みなんですよ。休みの日ぐらい弟の面倒みなさい」

辰次は母親の声を無視して、将太と一緒に駈け出して行く。

○畦道

稲を刈り取った後の田んぼの畦道を、将太と辰次が歩いて行く。

二人は軍歌を歌いながら、兵隊の様

に足を上げ手を振って行進していく。

将太と辰次の歌「見よ東海の空あけて、旭日高く輝けば、天地の正気澆刺と、希望は踊る大八州・・・」

○沼

藪に囲まれた小さな沼。

藪を掻き分けて将太と辰次が沼の畔に出て来る。

沼の畔の立ち木に、糸が数本結び付けられていて、糸の先は沼の中に沈んでいる。

将太が糸を手繰って巻き上げると、糸の先の釣針が水面に顔を出す。

辰次も別の糸を同じように巻き上げる。

将太「だめだ、餌だけ食われてる」

辰次「こつちもだ」

将太と辰次は、次々に糸を巻き上げてみるが、全部獲物は掛かっていない。

二人はズボンをたくし上げ靴を脱いで沼の浅瀬に入って行く。

将太「うへっ、冷てえ」

辰次「もうだめかなあ」

二人は並んで、浅瀬を岸边に向かってばしゃばしゃと手で水を掻き分けて進む。

将太「こんなに冷たくちゃ、蛙も冬眠かな」

辰次「餌の蛙が獲れなきゃ、ナマズも釣れん」

二人は何度か試みるが、蛙は現れない。

二人は諦めて、靴を履き藪の中に消える。

○草原

陽当たりの良い草原を将太と辰次が歩いて来て、草の上に並んで腰を下ろす。

辰次「腹減ったあ」

将太はズック鞆から弁当箱を取り出し、中のジャガイモを一つ辰次にやる。

辰次「弁当か？」

将太「母ちゃん、今日も学校有ると思ってる」

辰次はジャガイモにかぶりつく。

将太もジャガイモを食べる。

ジャガイモは四個しか無いので、二

個ずつをあつという間にたいらげる。

将太「イカの足を餌にしてみようか」

辰次「イカは海のものだろ、蟹は釣れるけど、

沼のナマズがイカ食うかな」

将太「辰ちゃんだって、腹が減ったら何でも食うだろが」

辰次「ナマズもそうかなあ」

将太「イモ二個じゃ足らん、腹が減って死にそうじゃ」

将太は、恨めしそうに弁当箱を睨んで、ズック鞆の中にしまう。

辰次「家帰るか？」

将太「帰ったって何にも有りやせん、闇市行こう」

辰次「うん」

二人は立ち上がって藪の中に消える。

○農家の庭

藪の中から、様子を窺うように将太と辰次が顔を出す。

二人の眼前には一軒の農家があり、軒先にトウモロコシが干してある。庭の隅には鶏小屋が在る。

二人は暫く様子を窺っているが、人の気配が無いので出て来て農家の中を覗く。

農家の中は、静まりかえっている。

二人は庭に転がっていた林檎箱を軒下に運んで来る。

背の高い将太が箱に乗って、軒先のトウモロコシを外す。

辰次がそれを受け取る。

二人は林檎箱を元に戻すと、今度は

鶏小屋の中を覗く。

鶏小屋には十数羽の鶏が飼われていて、奥に卵がいくつも産み落とされている。

小柄な辰次が、鶏小屋の鍵を外して中に入り込むと、中の鶏が騒ぐ。

将太はズック鞆から弁当箱を取り出し、鶏小屋の砂を箱の中に敷き詰める。

辰次が卵を盗って次々と将太に渡す。

将太は卵を弁当箱の砂の上に並べる。

辰次が鶏小屋から出て来て鍵を掛ける。

将太は弁当箱の卵の上に砂をかけて蓋を閉めると、慎重にズック鞆にしまう。

二人は、トウモロコシの束を抱えて
藪の中に駆け込む。

二人の鮮やかな連携プレー。

○闇市

廃材で建てたバラックや、葦簀掛け
の小屋が建て込んでいます。

筵を路上に敷いたり、林檎箱の上に
商品を並べた露天商が、所狭しと並
んでいる。

鍋釜日用品や古着、食べ物飲み物、薬、
酒煙草、あらゆる物が売られている。
露天商は声を張り上げて客を呼び込
む。

継ぎ接ぎだらけの国民服を着て、ズ
ック鞆やリュックを背負った男達や、

風呂敷包みを抱えたモンペ姿の女達
が、露店の間を押し合いながら右往
左往している。

露店の片隅には、白衣を着て松葉杖
をつき、片足で立って募金を募って
いる傷痍軍人もいます。

人混みをぬう様にして、トウモロコ
シの束を抱えた将太と辰次が来る。

○同 バラック小屋の裏口

将太と辰次が来て、将太が扉を叩く。
中から若い男（ブローカー）が顔を
出し、

ブローカー「今日はトウモロコシか」

将太と辰次がブローカーの前にトウ
モロコシを並べる。

ブローカー「これだけか」

ブローカーはトウモロコシを手にとって確かめると、ポケットから札束を取り出し、一円札三枚を将太に差し出す。

将太は受け取ってポケットにねじ込み、

将太「卵はいるか」

ブローカーは、怒った口調で、

ブローカー「最初から全部出せ」

将太はズック鞆から弁当箱を取り出し、蓋を開けて見せる。

ブローカーは、弁当箱を受け取ろうとするが、将太は弁当箱を引っ込めて、

将太「これは、別料金だ」

ブローカーは舌打ちして、ポケットから札束を取り出して一円札三枚を将太に差し出す。

将太は三円を受け取ると弁当箱を差し出して、

将太「弁当箱は返せ」

ブローカーは弁当箱を持って中に入る。

将太と辰次は顔を見合わせ、にやりと笑う。

ブローカーが空の弁当箱を持って出て来て将太を睨みつけ強い口調で、
ブローカー「今度は、最初から全部だせ」

将太は弁当箱を受け取り、

将太「毎度あり」

ブローカーは舌打ちして扉を閉める。

○同 立ち並ぶ露店

将太と辰次が食べ物屋の露店を一軒

一軒覗きながら歩いて来る。

将太「ちえつ、六円じゃ何にも食えないよ。

この間は腹いっぱい食えたのになあ」

辰次「おでんが十円は高いや」

将太「こんな値上がりするんじゃ、売値

も上げんと割り合わんな」

辰次「また明日やるか」

将太「そうだな、今日は帰って糞して寝るか」

辰次「ははは、帰って糞して寝よう」

将太と辰次は笑いながら駆け出す。

○将太の家

全ての雨戸が閉めきつたままである。

将太が帰って来て、中の様子を窺う

ように扉を開ける。

○同 居間

久美子が裁縫仕事をしている。

将太が帰って来たのに気付いて、

久美子「遅いねえ、どこほつつき歩いてんの」

将太「姉ちゃんは？」

久美子「出て行つたよ。全くあいつは盛り

の付いた雌猫だね。人の気も知らないで、

いい気なもんさ」

○同 台所

将太が台所に来て、久美子に悟られないように弁当箱を出して中を洗う。

○同 居間

久美子は裁縫仕事を続けながら、

久美子「今日は学校、休みだったらしいね。

学校行かずに遊びに行くんなら、弁当作らないよ。わかったね」

将太が居間に上がって来て、

将太「弁当って言ったって、朝のイモの残りじゃないか」

久美子「贅沢言うんじゃないよ。イモでも食べられれば、今はましなんだから。学校行かずに一日何してんの」

○同 奥の部屋

将太は、ここそそと入ってきて、久美子から見えないように襖の陰に寝転び、ポケットの一円札を出して数

える。

○学校 校門 朝

小学生達が登校して来る。

将太が、ズック鞆を襷がけにして、だらだらとした足取りで、石を蹴りながら歩いて来る。

ナレーション（将太の声）

「学校が再開された」

○同 教室

三十人位の生徒が着席していて、その中に将太も辰次も居る。

将太の席は後ろの方で辰次は前の方。男の教師が教壇から生徒達に向かって、

教師「ちゃんと墨と硯を持って来たか、忘れた者は？」

将太が立ち上がって、

将太「忘れた」

教師「しようがないなあ。それじゃ将太は、ここに来て先生のこれを使いなさい。さあ、それじゃ墨を擦りなさい。水はここに汲んできてあるから」

教師は教壇の端に置いたバケツを指す。

生徒はがやがやしゃべりながら、それぞれ水を汲んで墨を擦り始める。

将太は教壇に上がって、教師の机の硯で墨を擦り始める。

教師は、教室内をぐるぐると歩き回りながら、生徒が墨を擦るのを指導

している。

将太は、墨を擦るのに力を入れ過ぎて、教壇の前の最前列の生徒の顔に墨をかけてしまう。

墨をかけられた生徒「あつ」

墨をかけられた生徒は怒って、自分の筆に墨を含ませると、教壇に駆け上がり、将太の顔に筆で墨を塗りつける。

将太「やったなつ」

将太も筆に墨を含ませて相手の顔に塗りつける。

二人が教壇の上で墨の付いた筆を持つてもみ合う。

教師が二人に気付いて、慌てて教壇の上に駆け上がり二人を止める。

教師「何やってんだ、ほら席に戻って」

墨をかけられた生徒「将太が……」

将太は、墨だらけの顔でアツカンベーをする。

墨をかけられた生徒は教師に制されて、しぶしぶ自分の席に戻る。

教師「さあ、墨が擦れたら国語の教科書を出して」

将太「先生、習字するんじゃないんか」

教師「二十頁の『小さな伝令使』を開いて」

生徒達は教科書を出して開く。

将太も自分の席から国語の教科書を取って来て開く。

教師「それでは、その頁を墨で塗りつぶしなさい」

生徒達は、何を指示されたのか解ら

ず、きよんとした顔で教師を見上げる。

教師は、傍の席の生徒の教科書を、自分で塗りつぶして生徒達に見せる。

教師「このように、読めないように塗り潰す」
生徒達「えーっ」

将太「先生、おいら、この『小さな伝令使』の話が一番好きだ。他のつまらん話じゃだめか」

教師は教壇の将太の傍に来て、将太をじっと見つめて、

教師「将太、ごめんな。先生もこの話は好きだ。でも消さなきゃならないんだ」

教師は、将太の毬栗頭を強く撫ぜる。

将太は暫く躊躇しているが、筆に墨を含ませると思い切りその頁に塗り

たくり、真っ黒にしてみましょう。

他の生徒達も、信じられない様な、納得できない様な、不安な顔をしながら塗りつぶし始める。

将太「先生、塗り潰すのは戦争に負けたからか」

教師「戦争に負けたからじゃ無い・・・戦争をしたからだ」

教師は涙ぐむ。

生徒達の教科書が真っ黒に塗り潰されていく。

○畦道

将太と辰次がズック鞆を纏がけにして、軍歌を歌いながら、兵隊の様に足を上げ手を振って行進していく。

将太の顔は、墨で真っ黒である。

将太と辰次の歌「見よ東海の空あけて、旭日高く輝けば、天地の正気澆刺と、希望は踊る大八州・・・」

○農家の庭

藪の中から、様子を窺うように将太と辰次が顔を出す。

二人の眼前には一軒の農家が有る。

もう軒先にトウモロコシは干してない。

二人は暫く様子を窺っているが、人の気配が無いので出て来て農家の中を覗く。

農家の中は、静まりかえっている。二人は庭の隅の鶏小屋の中を覗く。

鶏小屋の奥に卵がいくつも産み落とされている。

辰次が鶏小屋の鍵を外して入り込むと、中の鶏が騒ぐ。

将太はズック鞆から弁当箱を取り出すと、鶏小屋の砂を箱の中に敷き詰める。

辰次が卵を盗って将太に渡し、将太は卵を弁当箱の砂の上に置く。

将太が二つ目の卵を受け取った時、後ろから大きな怒鳴り声がある。

農家の男の声「こらっ、おまえらか」

将太が振り返ると、農家の男が血相を変えて走って来る。

将太は慌てて手にした卵をポケットに突っ込み、弁当箱を抱えて逃げ出

す。

辰次も鶏小屋から逃げ出そうとする。

辰次が鶏小屋から出たところを、農家の男が辰次の腕を捕まえる。

将太が、弁当箱の卵を手に取って、農家の男の顔に投げつける。

顔に卵をぶつけられて、農家の男が少し怯んだ隙に、辰次は農家の男の手に噛みつく。

農家の男「痛てえっ、何しやがる」

農家の男が手を離すと、辰次は必死で逃げ出す。

農家の男「待て、待たんか、こらっ」

将太と辰次は、藪の中に駆け込む。

農家の男は二人を追おうとするが、鶏小屋の開いた扉から鶏が数羽逃げ

出しているのに気付き、逃げた鶏を追いかける。

○畦道

藪の中から将太と辰次が転げ出て来て、何度も振り返りながら駆けて行く。

○留蔵の家 庭

藪の中から、様子を窺うように将太と辰次が顔を出す。

二人の眼前には別の農家と納屋がある。

二人は暫く様子を窺っているが、人の気配が無いので出て来て納屋の中を覗く。

納屋の中には誰もいない。

二人は納屋の中に入り扉を閉める。

○同 納屋の中

納屋は古く板壁に隙間が沢山有り、その隙間から外が覗ける。

二人はその隙間から外の様子を窺い、息を潜める。

隙間から、農家の男が走って来て納屋の前を通り過ぎるのが見える。

将太と辰次は身体を固くして、じつと息を潜める。

農家の男の声「子供が二人逃げて来なかったか」

留蔵の声「いや、見かけんな。どうしたんだ」
農家の男の声「卵泥棒だ。このごろちよく

ちよくやられてる。この間は、干してた
トウモロコシまで持つて行きやがった」

留蔵の声「沼の方に逃げたんじゃないか」

農家の男「見つけたら捕まえてくれ。どこ
のガキだか知らんが、こつぴどく懲らし
めてやる」

板壁の隙間から、農家の男が走り去
るのが見える。

将太と辰次は緊張が解けて、大の字
に寝転んで大きく息を吐く。

突然納屋の扉が開けられて、入り口
に身体の高い男（留蔵）が立ちは
だかる。

将太と辰次は驚いて立ち上がるも、
そのまま固まる。

立ちはだかった留蔵は静かな声で、

留蔵「卵泥棒は、おまえたちか」

辰次が思わず首を縦に振る。

留蔵「二人共そこに正座しなさい」

留蔵は静かに話すが、その威圧感
はすぐく、二人は縮みあがって、素直
にその場に正座する。

留蔵「盗んだのは卵だけか」

将太が卵を取り出そうとポケットに
手をつ突っ込むと、卵は割れていて、
黄色くべちゃべちゃになった手で殻
をつかみ出して留蔵に差し出す。

留蔵「その卵、盗んでどうするつもりだった」

将太と辰次は顔を見合わせ、俯いて
黙っている。

留蔵が声を少し荒らげて、

留蔵「どうするつもりだったんだ」

将太が俯いたままぼそっと、

将太「闇市で売る」

留蔵「闇市で売ってどうする」

将太「売った金で、残飯シチューを食う」

留蔵「腹が減ってるのか」

二人は顔を見合わせ、首を縦に振る。

留蔵「卵は誰の物だ。おまえ達が鶏を育て

ているのか。えっ」

二人は俯いて黙っている。

留蔵「腹が減ったら他人の物でも盗んで食
べるのか」

二人は俯いて黙っている。

留蔵「悪い事だと解っててやったんだな」

二人は俯いたまま首を縦に振る。

留蔵「暫くそのまま正座してろ」

留蔵は、扉を閉めて納屋を出て行く。

二人は留蔵が出て行くと、壁の隙間
ににじり寄って外を覗く。

留蔵が、納屋の前の切り株の上に何
かをのせて、小槌で叩いているのが
見える。

将太が辰次に小声で耳打ちする。

将太「だめだ、逃げられん」

隙間から、農家の男が戻って来て、

留蔵に話しかけるのが見える。

農家の男の声「逃げられた。また来やがっ
たら、今度こそとつ捕まえてやる」

留蔵の声「同じ奴はもう来ないだろう」

農家の男の声「畜生」

将太と辰次は身体を固くして、びく
びくしながら隙間から見ている。

農家の男が帰って行くのが見える。

将太と辰次は、神妙に正座しなおす。

見せてみる」

○同 納屋の外

留蔵は、空き缶を切り株の上にのせて、小槌で少しずつ叩いてブリキ板に延ばしていく。

留蔵「もう出て来てもいいぞ」

納屋から、二人が恐る恐る出て来る。

留蔵「もう二度とするんじゃないぞ」

留蔵は髭もじやの大男だが目は優しい。

留蔵「今日は学校で習字でもしたんか。お

まえ、顔真つ黒だぞ」

留蔵は将太の顔を見て笑う。

将太「教科書を墨で塗り潰した」

留蔵「学校で教科書を塗り潰す?・・・どれ、

将太は鞆から塗り潰した国語の教科書を取り出して留蔵に見せる。

留蔵「ここまでさせるのか・・・」

留蔵は教科書を将太に返す。

将太は教科書を鞆にしまいながら、

将太「おじさん、何してるんだ」

留蔵「空き缶を潰してブリキ板にしてる。

ブリキ板でおもちゃを作るんだ」

辰次「闇市で売ってるやつか」

留蔵「そうだ。空き缶を拾って来れば、残

飯シチューが食えるくらいのお金で買って

やる。俺は足が悪いから、空き缶集めが

難儀だな。進駐軍のゴミ置き場に行けば、

空き缶はいくらでも転がってる。卵泥棒

よりは、ずっとましな小遣い稼ぎになる

ぞ」

将太と辰次は顔を見合わせる。

留蔵「もう二度と泥棒はするんじゃないぞ、

さあもう帰れ」

留蔵は、空き缶を小槌で叩く作業を

再開する。

将太と辰次は、まだ農家の男がそこ

らに居そうで、辺りを気にしながら

出て行く。

○将太の家

全ての雨戸が閉めきったままである。

将太が帰って来て、家の中に入る。

○同居間

久美子が着物を何枚も畳んで風呂敷に包んでいる。

久美子「遅いねえ。どこほつき歩いてたの。

母ちゃん、これから着物納めて来るからね」

久美子は、居間に上がって来た墨だ

らけの将太の顔を見て笑いながら、

久美子「なんだいその顔。その顔で帰って

来たのかい。今日は習字でもしたの」

将太「習字じゃないよ、教科書を墨で塗り

潰したんだ」

久美子「なんで教科書を塗り潰すの」

将太「先生に言われて皆でやったんだ」

久美子「えっ、またそんな嘘言つて。さあ、

母ちゃん出かけるから、顔洗って留守番

してるんだよ」

久美子は、風呂敷包みを重そうに担いで急いで出て行く。

○同 台所 夜

久美子がイカ飯を作っている。

家中にイカ飯を煮る匂いが充満する。

○同 奥の部屋 夜

将太は、寝転んでノラクロを読んでいる。

イカ飯の匂いにつられて起き上がり、台所に跳んで行く。

○同 台所 夜

将太が久美子の傍に来て嬉しそうに、

将太「母ちゃん、イカ飯か」

久美子も嬉しそうに、

久美子「そうだよ、久しぶりにお金が入ったから、奮発して闇市で米買って来た。さあ、卓袱台お出し」

○同 居間 夜

将太は居間に駆け上がり、卓袱台を出して食事の準備をする。

久美子がイカ飯を皿に盛って運んで来る。

久美子「さあ、たんとお食べ」

将太はガツガツと夢中で食べる。

久美子はそんな将太を嬉しそうに見ながら食べている。

久美子「旨いかい」

将太「うん」

皿の上に最後のイカ飯が一つ残る。

将太が久美子に、目で食べていいかと尋ねる。

久美子は、にっこり笑って、

久美子「いいよ、お食べ」

将太は、ぱっと手を出して最後のイカ飯を口に突つ込む。

久美子は隅に置いてあつた風呂敷包みを取って、中から白いズック靴を取り出して将太に見せる。

久美子「ほら、これは川や海に履いて行っちゃだめよ。汚れる時は、古いの履いて行きなさい、いいね。後ろに名前書いていたからね」

将太はイカ飯を口に頬張つたまま靴

を受け取り、ひと通り眺めまわしてから履いてみる。

久美子は、嬉しそうに笑いながら、久美子「家の中で履くんじゃないよ」

○同 奥の部屋 夜

将太が布団の上に寝転んで、買つて貰つた靴を弄っている。

久美子の声「電気消して、早く寝なさい」

将太は靴を枕元に揃えて置き、電気を消して、襖をそつと少し開けて居間を覗く。

居間で久美子が裁縫仕事をしているのが見える。

将太は、襖をそつと閉めて寝る。

○学校 教室

休み時間で、生徒がそれぞれ屯って話している。

将太は教壇の先生の机に腰かけ、足をぶらぶらさせて新しい靴を見せびらかしているが、誰も気付いてくれない。

辰次だけが羨ましそうな顔で将太に近付いてきて、

辰次「買ってもらったんか」

将太「辰ちゃんも買ってもらえよ」

辰次「うちは、無理じゃ」

将太「学校は、腹が減るだけでつまらん。

旨い物食いに行こう」

辰次「どこへ」

将太「闇市じゃ」

辰次「金あるんか」

将太「だいぶ貯まつてる」

将太は、自席に戻ってズック鞆を襷がけにすると、教室を出て行く。

辰次も鞆を持って将太の後を追う。

○学校 裏門

将太と辰次が人目を避けるように校舎から出て来る。

二人は、辺りの様子を窺い、誰もいない事を確認すると、脱兎の如く裏門から駆け出て行く。

○闇市

人混みをぬうように将太と辰次が来る。

○同 露店の中

大鍋でドロドロの茶色いシチューが、ぐつぐつと煮えている。

店先に、『残飯シチュー・一杯五円』の張り紙。

将太がポケットから一円札の束を取り出し、数えて店のおやじに渡す。

ちょうど十枚、十円である。

店のおやじが、残飯シチューを椀に注いで将太と辰次に渡す。

二人は店先の林檎箱に腰かけて、残飯シチューを旨そうに食べる。

辰次「何が入ってるんかなあ」

将太「判らん、だけど旨いな」

通りの先の角に、白衣の傷痍軍人が松葉杖について、片足立ちで募金を

しているのが見える。

二人は食べ終わると、

辰次「あいつ、この間二本足で歩いてた」

将太「試してみるか」

将太は傷痍軍人に向かって駆けて行き、傷痍軍人の松葉杖を思い切り蹴飛ばす。

辰次は将太を追いかけて駆けて行き、傷痍軍人が足元に置いていた募金箱を蹴り飛ばす。

傷痍軍人はよろけて倒れそうになるが、隠していた足を出して両足で踏ん張り倒れない。

蹴り飛ばされた募金箱から小銭が散乱する。

傷痍軍人「この野郎、待て」

傷痕軍人は慌てて小銭をかき集める。

将太と辰次は少し離れた場所から、傷痕軍人の慌てぶりを見て笑っている。

その時、将太が後ろから男に羽交い絞めにされて、宙に抱え上げられる。足をバタバタさせてもがく将太の前に、別の男が現れて、将太の足を押さえて両足の靴を脱がす。

男は、脱がした靴をしげしげと眺めて、

靴泥棒「坊主、いい靴履いてるじゃないか、俺が買つてやるよ。名前が書いてなきゃ、五十円つてとこだが、十円だな」

男はポケットから十円札を取り出すと、将太のポケットにねじ込む。

将太「やめろ、返せ」

将太は足をバタバタさせてもがくが、後ろから大人の男に羽交い絞めされていて身動きが取れない。

辰次が、将太の靴を奪った男の足に組み付くが、軽く蹴り飛ばされる。

将太は、羽交い絞めされていた男に投げ飛ばされる。

将太と辰次は路上に転がる。

二人の男は、笑いながら歩き去る。

傷痕軍人は、小銭をかき集め終わると将太達に気付き、松葉杖を振りかざして怒鳴りながら、二人に向かって走って来る。

傷痕軍人「小僧、待たんか」

将太と辰次は慌てて起き上がり、走

つて逃げ出す。

○将太の家 外

将太と辰次が元氣なく歩いて来る。

将太は裸足である。

隣の畳屋の爺さんが店先から将太を
見て声をかける。

爺さん「将太、靴どうした、もう壊れちま
ったか」

将太は答えずに、自分の家の扉をそ
つと開けて家の中を覗く。

将太「辰ちゃん、ちよつと待っててくれ」

辰次は頷き、一緒に将太の家の中を
覗く。

○同 土間

将太は、久美子に気付かれないよう
にそつと家の中に入って来て、下駄
箱の古い靴を履こうとする。

久美子が台所から土間に出て来て、

久美子「あら、今日は随分早いんだね」

久美子は将太に近づき、将太が裸足
であることに気付く。

久美子「将太、靴どうしたのさ」

将太は観念して、うな垂れて立ち小
声で、

将太「盗られた」

久美子は驚いて、

久美子「えっ、盗られた。どこで？」

将太はうな垂れて黙って立っている。

久美子は驚きから怒りに変わって、

将太の肩を掴んで揺すぶり、

久美子「どこで盗られたのか、ちゃんと言
ってごらん」

将太は俯いたまま小声で、

将太「闇市」

久美子はますます怒って怒鳴る。

久美子「なんで闇市なんか行つたの。今日
は学校あつたんでしょ」

将太は俯いたまま黙って耐えている。

扉の外から中を覗いていた辰次は、
これは拙い展開だと察して、将太を
待つのをやめ、駆け出して行く。

久美子「誰に盗られたの、言っごらん」

将太「二人組のおじさん。十円で買ってや
るって」

将太はポケットから十円札を取り出

して久美子に差し出す。

久美子「ばか言うんじゃないよ。あれ
百五十円したのよ。母ちゃんが百五十円
稼ぐのにどんだけかかるか・・・ばか、
ばか、ばか」

久美子は将太の頭を平手で何度も叩
く。

将太は叩かれてもじっと耐えている。

久美子「学校サボって闇市行つて、せっか
く買ってやった靴盗られてくるんだか
ら・・・あんたみたいな子、もう知らないよ」
久美子は居間に駆け上がり、蹲って
畳を叩きながら泣き始める。

将太は俯いたまま黙って立っている。
久美子「ばか、ばか、ばか」

久美子は何度も畳を叩く。

将太はその場に居るのが耐えられなくなつて、古い靴を履いて外に飛び出す。

ぶら下がるように腕を絡ませ、スキップするような軽い足取りで歩いて来る。

雅恵が将太に気付いて、

○闇市

将太が露店を覗いたり、きよろきよろ辺りを見回しながら歩いて来る。

将太は、靴を売っている店、盗んだ男達を探している。

しかし見つからず、気落ちして露店の陰で俯いて立ち尽くす。

剛が人混みを割るように、肩で風を切つて歩いて来る。

剛は、飛行服に白いマフラー姿、右肩に軍刀を担いでいる。

派手な服を着た雅恵が、剛の左腕に

雅恵「将太、こんな所で何してるの」

将太は俯いて、もじもじしている。

雅恵と剛が将太の傍に来て、

剛「何しけた面してんだ」

将太が首を横に振る。

雅恵「どうしたの、何かあったの」

将太は小声で、

将太「母ちゃんに買って貰った靴、盗られた」

剛が気色ばつて、

剛「ここ確か、どんな奴だ」

将太「二人組のおじさん。十円で買ってやるって、無理やり脱がされて持ってた」

剛「よし、俺が取り返してやる、付いて来い」

剛は闇市の奥の方に向かって歩き出す。

雅恵と将太が慌てて剛の後を追う。

○同 靴の露天商の店先

林檎箱を雛壇状に積み上げた上に、所狭しと靴を並べて売っている。

一番最前列に並べられているのは、サイズも形もバラバラな片足だけの靴。

剛が来て、並べられている靴を見渡す。

雅恵と将太も来て、剛が将太に、
剛「どうだ、ここにお前の靴は有るか」

将太は見回し、上段の左端に置いて

ある靴を指さして、

将太「あれが似てる」

剛が靴の露店商に、

剛「その白いズック靴見せろ」

靴の露店商は、その靴を手に取って
見せ、

靴の露店商「新品だから二百円だよ」

その靴の踵の所には名前が書いてある。
る。

剛「名前が書いてあるじゃないか、盗品だろ、
何て書いてあるんだ」

靴の露店商は、少し焦って、

靴の露店商「こりゃ、俺の息子に履かせよう
と思って、名前書きしまったんだが、
サイズが合わなくてね、百五十円にまけるよ」

剛は、にやにやしなから、

剛「息子さん、何ていう名だ」

靴の露店商は、靴に書かれた名を見て、

靴の露店商「将太って言うんだ、百五十円
なら安いぜ」

剛は将太に、

剛「この男か」

将太は首を横に振る。

剛「この子も将太って言うんだ、ちようど
いいじゃないか、それよこせよ」

靴の露店商は顔色を変えて、その靴
を引っ込める。

剛が靴の露店商の首に軍刀の鞘を押
し付けて、

剛「誰から買った」

靴の露店商は慌てて後ずさりしながら、

靴の露店商「盗品だろうが何だろうが、俺
は金出して仕入たんだ、ただじゃやれね
え」

剛は、カチツと軍刀の鯉口を切り、
剛「しのごの言わずに、おとなしく渡せ」

靴の露店商は、観念して靴を剛に渡
す。

剛は靴を将太に渡して、
剛「これだろ」

将太は嬉しそうに靴を受け取る。

剛は軍刀を引っ込めると、十円札を
ポケットから取り出して、靴の露店
商に投げつける。

剛「残りは仕入れた奴から取り返しな、悪

く思うなよ」

剛は颯爽と店を出て行く。

靴の露店商は、恨めしそうに剛を睨んで、十円札を拾う。

○闇市

剛が人混みを割るように、肩で風を切って歩いて行く。

剛の後ろを雅恵と将太が話しながら付いて行く。

将太「どこに住んでるの」

雅恵「倉庫の二階・・・母ちゃんどうしてる」

将太「いつもと同じだよ、姉ちゃんのこと、

盛りのついた雌猫だつて言ってた」

雅恵「盛りのついた雌猫か・・・」

雅恵は自嘲的に笑う。

雅恵「父ちゃんは」

将太「帰つて来ない、父ちゃん生きてるかな」

雅恵「・・・」

後ろから解放区の用心棒三人が剛を追って来て、

解放区の用心棒「おい、待て」

剛は振り返って立ち止まり、用心棒達に向き合う。

剛「雅恵、先に帰つてろ」

雅恵と将太は、走って逃げ出す。

解放区の用心棒「ここは、おまえの来る所

じゃねえ、無事に出れると思うなよ」

剛「ここは日本だ、お前達の好きにはさせねえ」

用心棒の一人が匕首を抜いて剛に切りかかる。

剛はそれをかわすと、軍刀を抜いて振り回す。

用心棒達は軍刀を避けて数歩退く。

剛はその隙に、脱兎の如く逃げ出す。

解放区の用心棒達「こらあ。待てえ」

用心棒達は大声で叫んで、剛を追う。

剛は、軍刀を振りかざして走る。

闇市の人混みが、悲鳴を上げて左右に割れる。

剛が逃げ、解放区の用心棒達が追う。

闇市の真ん中に大きな通りが通っていて、その北側が、第三国人が仕切る解放区と呼ばれる地域で、南側が的屋の福田組が仕切る地域。

剛は通りを渡りきり、解放区の用心棒達は、境の通りまでしか追って来

ない。

剛は軍刀を鞘に納め、解放区の用心棒達と道を隔てて対峙し睨み合う。

福田組の若い衆達が、解放区から走り出て来た剛の傍に集まって来る。

揃いの半纏を着た福田組の若い衆達が剛と並んで立ち、解放区の用心棒達と睨み合う。

○将太の家 土間

将太が帰って来る。

○同居間

久美子が裁縫仕事をしている。

将太が久美子の傍に来て、取り返した靴を久美子に見せる。

久美子は驚いて、

久美子「どこで見つけたの」

将太「剛さんが、取り返してくれた」

久美子「ええっ、闇市で」

将太「うん」

久美子「雅恵も一緒に居たのかい」

将太「うん」

久美子「雅恵どうしてた、どこに居るって」

将太「倉庫の二階だって」

久美子「倉庫ってどこの、元気だったかい」

将太「闇市の先の海の傍の倉庫だろ、前に

剛さんが居るの見た事有る」

久美子「あんな所に居るの」

将太「姉ちゃんに会いに行くの?」

久美子「行かないよ、あんな娘は放つとき

やいいの。それよりその靴、もう闇市な

んかに履いて行くんじゃないよ」

将太「うん」

久美子「剛は倉庫で何してるって」

将太「戦争」

久美子「戦争?」

将太「炭鉱にいた朝鮮人や中国人が攻めて来るかもしれないから、倉庫守るんだって」

久美子「何言ってるのかねえ、ただの倉庫の用心棒じゃないか、福田組に雇われてるやくざと一緒にだよ」

○同 土間

将太は、取り返した靴を大事そうに下駄箱にしまう。

その時、汚れた国民服を着て大きな

ザックを背負った男（高田義男）が訪ねて来る。

高田「こちらは、経澤幸吉さんのお宅でしょうか」

久美子の声「はい、そうですが」

高田「幸吉さんは、ご在宅ですか」

久美子は裁縫仕事をやめ、怪訝そうな顔で土間に出て来る。

将太も下駄箱の前で怪訝な顔をして、

高田の様子を見ている。

久美子「幸吉は、まだ戻りませんが。どんな様ですか」

高田「いや、突然伺って申し訳ありません。

私、経澤さんと一緒に光洋丸に乗っておりました高田義男と申します」

久美子「光洋丸に・・・で、どのようなご

用件でしょうか」

高田「はい、経澤さんの帽子をお返しにあげました」

高田はザックを土間に下ろし、中から古い汚れた船員帽を取り出して久美子に差し出す。

久美子は帽子を受け取り、帽子を眺めまわすが、幸吉の帽子かどうか半信半疑である。

久美子「どうしてこの帽子を・・・」

高田は俯きかげんに小声で話す。

高田「去年の今頃、光洋丸はフィリピン沖で触雷して沈没しました。・・・経澤さんと私は、海に投げ出され、船の残骸に掴まって漂流したんです」

久美子は、高田をじっと見つめて聞

いている。

高田「私は怪我をしてたんですが、経澤さんが手当てをしてくださいました。一昼夜そのまま二人で漂流していました。最初は周りに他の仲間達も見えていたんですが、段々バラバラになって、翌朝には大海原に我々だけでした」

高田は、しばらく沈黙する。

高田「私が覚えているのは、そこまでです。気が付いた時には、私はその帽子を被って残骸の上で一人で寝ていました。機関長が、気を失った私を引き上げて、帽子を被せてくれたのだと思います」

高田は涙声になる。

久美子は帽子を握りしめて、じっと

高田を見つめて聞いている。

高田「その後私は、アメリカの駆逐艦に発見され、捕虜になりました。私は、駆逐艦の中も、収容された収容所でも、機関長を探しました・・・探し回ったんです」

高田の目から涙が溢れ出る。

高田「しかし、機関長の消息は全く掴めませんでした」

高田は大きく息をつぐ。

高田「終戦までその収容所に居て、先月博多に帰還しました。機関長は元気でしたから、ひよっとして先に帰郷なさってるかもしれないと思い、お訪ねした次第です」

久美子は、帽子を両手で強く握って、

久美子「有難うございました」

久美子は高田に深々と頭を下げる。

高田は背筋を伸ばし、初めて久美子を正面から見つめて、

高田「申し訳ありません」

高田も久美子に深々と頭を下げる。

高田「機関長がお帰りになりましたら、私は松前の実家に居るとお伝えください。

失礼いたします」

高田はもう一度深々と頭を下げると、逃げるように出て行く。

久美子は、帽子を握りしめたまま、暫く茫然とそのまま立っている。

一部始終を見ていた将太が久美子に、
将太「父ちゃん、死んじゃったの」

久美子は、きつと将太を睨んで、

久美子「ばか言うんじゃないの。父ちゃんが海で死ぬわけないでしょ。あんなに泳

ぎが上手いんだから・・・帽子が先に帰って来ただけ、待つてればそのうち帰って来るよ」

久美子は居間に上がって、神棚に帽子を載せて拝むと、何事も無かった様に裁縫仕事を再開する。

○将太の家 奥の部屋 夜中

将太が布団を被って眠っている。

将太が目を覚まし、起き上がって周りを見まわすが、隣の布団に久美子はいない。

将太は、襖をそつと開けて居間を覗く。

居間は電気が消えていて暗いが、神棚の下に久美子が蹲って帽子を握り

しめ、声を殺して泣いている姿が見える。

将太は、見てはいけない物を見てしまった様に思い、慌てて襖を閉め布団を被る。

○進駐軍のゴミ捨て場

ゴミが山の様に捨てられている。

ボロボロの服を着て手拭で鼻を覆った数人の男女が、ゴミの山に登ってまだ食える物や使える物を拾っている。

将太と辰次も手拭で鼻を覆ってゴミの山に登り、ゴミを掻き分けながら空き缶を拾っている。

拾った空き缶を、穀物用のズタ袋に

次々に放り込む。

辰次が袋を持ち上げてみて、

辰次「将ちゃん、これ以上入れると、重くて持ち上げられなくなるよ」

将太「今日はこの位にしとくか」

将太も袋の所に戻って来て、袋を持ち上げてみる。

○畦道

将太と辰次がズタ袋を引きずりながら歩いて行く。

○留蔵の家 庭

将太と辰次がズタ袋を引きずって来て、

将太「おじさん居るか、空き缶拾って来た」

留蔵が足を引きずりながら出て来て、

留蔵「おう、随分大量だな。裏の川できれいに洗ってきてくれ。手を切らないようにな」

将太と辰次は、ズタ袋を引きずって家の裏に行く。

○同 裏手の水路

川と言っても小さな水路である。

将太と辰次は、空き缶を水路端にぶちまけ、水路で一つ一つ洗う。

辰次「冷てえなあ。手が凍りそうだ」

将太「もうすぐ、雪降るな」

将太は空を見上げる。

鉛色の冬空が広がっている。

○同 庭

将太と辰次は、洗った空き缶を一つずつ庭に並べて干す。

○同 家の中

留蔵はペンチを使って、ブリキ板でおもちゃのジープを作っている。

将太と辰次が入って来る。

留蔵「おう、ご苦労さん」

留蔵は胴巻きの中から財布を取り出し、二人にそれぞれ五円ずつ渡す。

辰次「おじさん、それ何作ってるの」

留蔵「ジープだ」

留蔵は、後ろに置いてある箱から完成品のジープのおもちゃを取り出して二人に見せる。

二人は目の色を変えてジープを見る。

将太「すげー、これ、ジープって言うんか」

留蔵「進駐軍が乗り回してるだろ」

辰次「あれ、早くて格好いいよなあ」

将太「本物そっくりだ」

留蔵「そうか」

留蔵はにやりと笑う。

留蔵「あれだけあれば、当分作るのに専念できる。また暇な時に拾って来てくれ」

将太「うん」

将太と辰次が出て行く。

○闇市

人混みをぬって将太と辰次が来る。

○同 露店の前

露店の中では、大鍋でドロドロの茶色いシチューがぐつぐつと煮えている。

店先に、『残飯シチュー・一杯五円』の張り紙。

将太と辰次は露店の中を覗くが、顔を見合わせて、中に入らず通り過ぎる。

将太「食う気しないな」

辰次「匂いがなあ・・・」

将太「この間は、旨かったのに」

辰次「空き缶拾いしたら、あれはもう食えん」

昭和二十一年一月一日 函館

爺さん「雪だねえ」

○将太の家 外

雪が降っている。

○同 奥の部屋

将太は、寝転んでノラクロを読んでいる。

ナレーション（将太の声）

「新しい年になった。しかし、何も変わらん。益々食い物が無くなって、腹が減つてしょうがない」

○同 土間

扉が開いて、隣の畳屋の爺さんが来る。

○同 居間

久美子「あら、明けましておめでとうございます。寒いですから奥にどうぞ」

爺さんは、居間に上がって来る。

爺さん「正月も仕事かい。精が出るねえ」

久美子は、裁縫仕事を続けたまま、

久美子「すいません、お構いもしませんで。

頼まれ仕事が終わらなくて」

爺さん「いや、わたしやいいんだよ。小樽

の親戚から身欠き鯿をもらったんでね、

ちよつとお裾分けに持つて来たただけだから」

ら

久美子「いつもすいません。鯿ですか」

爺さん「正月だから数の子でも食いたいわねえ」

ど、このご時世だからしょうがないねえ」

久美子「どうなってしまうんでしょう。何でも毎月倍に値上がるし、配給は欠配続きだし、もう食べていけませんよ」

爺さん「それに何だか物騒になってきたね」

久美子「朝鮮人が攻めて来るって話ですか」

爺さん「近々函館から朝鮮への帰還船が出るらしいね。それで、道内の朝鮮人が函館に集まって来てるらしいんだ。炭鉱や港では、ずいぶんと朝鮮の人達に酷い事してきたからね、仕返しされるんじゃないかって・・・」

久美子「暴動が起きるんですか」

爺さん「そりゃ判らん」

久美子「剛が、暴動から倉庫守るって言うてるみたいですよ」

爺さん「そりゃ、闇市の話だろ。あそこじゃ、

解放区の第三国人と福田組の連中が、しょっちゅう乱闘しとるらしい。解放区の

連中は、日本の法律無視して何でも有り

だが、警察も手が出せないようだ」

久美子「剛と一緒にいる雅恵が心配で・・・」

爺さん「まだ帰って来ないのかい。そりゃ心配だねえ・・・将太は？」

久美子「奥に居ますよ」

爺さん「将太、お年玉やるよ」

将太が居間に飛び出して来る。

爺さんが将太にポチ袋を渡す。

将太は嬉しそうに受け取る。

久美子「すいません、お年玉までいただいて。

ほら、将太、お礼は」

将太は、爺さんにぺこっと頭を下げ

て、

将太「ありがとう」

爺さん「正月だつて言うのに餅も食えんし、子供にとつて楽しい事が一つも無い。可哀そうになあ」

爺さんは、ぶつぶつ言いながら出て行く。

ナレーション（将太の声）

「数日後、本当に倉庫が襲われた」

○倉庫 外 夜中

雪が降っている。

五人の男達が倉庫の扉に忍び寄つて来て、一人が扉の鍵をこじ開ける。

○同 二階の剛の部屋 夜中

剛と雅恵が同衾している。

雅恵が剛の愛撫に喘いでいる。

剛が物音に気付き、跳ね起きる。

剛は禪一つの姿で、壁に立て掛けてあつた軍刀を手にとると、そつと部屋を出て行く。

雅恵は慌てて服を着る。

○同 一階 夜中

男達が扉を開けて侵入する。

暗闇の中を、男達の持つ懐中電灯の光が走り回る。

一人の男が懐中電灯を手し、ゆっくりと階段を上がつて来る。

剛は階段の上で軍刀を抜き、階段の

照明を点けると、軍刀を振りかざして一気に階段を駆け下りる。

階段を上って来た男は、剛に蹴り落とされて悲鳴を上げて階段を転げ落ちる。

階段の下に居た男が、懷から拳銃を抜いて、剛に向ける。

剛は、階段から飛び降りざまに軍刀を振り下ろす。

銃声と同時に拳銃を構えた男の腕を切り落とす。

拳銃を握ったままの腕が、切り落とされて床に転がる。

腕を切り落とされた男は、悲鳴を上げて腕を押さえて転げ回る。

剛は軍刀を振りかざして、倉庫の奥

へ別の男を追う。

倉庫襲撃者「逃げる」

侵入した男の一人が、腕を切られた男を抱え起こし、引きずって外へ連れ出す。

階段から蹴落とされた男も骨を折ったようで、別の男に支えられて逃げ出す。

剛に追われた男は、匕首を抜いて構えるが、剛が軍刀を振りかざしてにじり寄ると、奇声を発して逃げ出す。

剛は、扉の所まで追って行くが、外までは追わない。

剛は軍刀の血のりを振り払うと、階段の上を振り返る。

階段の上に、雅恵が頭から毛布を被

って座り込み震えている。

剛は階段を悠然と上がって行き雅恵に、

剛「ここは危ない、家に帰ってろ」

雅恵は剛の足にしがみつく。

○将太の家 外 夜中

雪が降っている。

毛布を被った雅恵が、扉を必死に叩いて、

雅恵「母さん、あたしよ。開けて」

○同 奥の部屋 夜中

寝ていた久美子が扉を叩く音で目覚めて起き上がる。

将太も目を覚まし、何事かと目をこ

する。

○同 土間 夜中

久美子が来て、外の様子を窺いながら恐る恐る心張棒を外し、扉の鍵を開ける。

雅恵が、真っ青な顔色で飛び込んで来る。

久美子「どうしたの」

雅恵は奥の部屋に飛び込んで行く。

久美子は、急いで扉を閉めて鍵をかけ、心張棒を差し込む。

○同 奥の部屋 夜中

雅恵が毛布を被って震えている。

久美子が雅恵に近寄って、

久美子「雅恵、大丈夫かい」

雅恵「・・・」

久美子「しっかりおし。さあ落ち着いて、

何があつたか話してごらん」

雅恵は、毛布を被ったまま小声で、

雅恵「倉庫が・・・」

○警察署 留置場

飛行服姿の剛が、留置場の中にいる。

巡查Aが来て、留置場の鍵を開けて、

巡查A「出る」

剛は、膨れ面で出て来る。

巡查は剛に手錠と腰縄を掛け、

巡查A「ほら、歩け」

剛は歩きだし、巡查Aが腰縄を持つ

て剛の後から付いて行く。

○同 署長室

署長の前に、手錠と腰縄を掛けられ

た剛と、剛の腰縄を引いた巡查が立

っている。

剛が署長を睨みながら強い口調で、

剛「正当防衛だろ、早く釈放しろよ」

署長は、にやにやしながら挑発的に、

署長「お前、予科練帰りらしいな」

剛「・・・」

署長「その飛行服、どこで盗んできた」

剛「・・・」

署長「お前、飛行機乗った事ないだろう。

触った事も無いんじゃないか」

剛「・・・」

剛は署長を黙って睨みつけている。

署長「予科練じゃ、朝から晩まで上官に殴

られてたろう・・・毎日毎日、塹壕掘りや飛行場の補修なんかの土方仕事ばかりさせられて・・・」

剛「予科練を愚弄する気か」

剛は怒鳴って署長につかみかかろうとするが、後から巡査に抑えられる。

署長「怒るところをみると、凶星だな。俺は海軍に居たから実情を良く知っている。戦争は負けてしまいうし、憧れの飛行機には一度も乗れず終い。お前の暴れたい気持ちは良く解る・・・が、こんな物騒な物をこの街で振り回されちゃこまるんだよ」

署長は剛の軍刀を手を取って見せる。

署長室のドアがノックされる。

署長「どうぞ」

巡査Bの声「失礼します」

ドアが開いて、巡査Bが、羽織袴姿の福田組の組長と、福田組の半纏を着た若い衆を連れて入って来る。

組長「この度とはんだお騒がせをして、申し訳ありません」

組長は、署長に頭を下げる。

署長「こんなチンピラのガラ受けに、組長自ら来られるとは、ご苦勞な事で・・・こいつは、お宅の身内者かい」

組長「いや、身内という程の者じゃありませんが、腕がたつんで倉庫番をさせてまして」

署長「番犬代わりには、この暴れん坊はうってつけという訳だ」

組長「釈放していただけるんですね」

署長「ああ連れて帰れ。ただ折角来たんだ、

少し話をしていかんかね」

組長「有難うございます」

組長は振り返り、後にいる若い衆に、

組長「先に連れて帰つてろ」

若い衆「へい」

巡查 A が剛の腰縄と手錠を外す。

剛は大きく背伸びをして、にやりと

笑い、

剛「世話かけたな」

剛は若い衆と一緒に出て行く。

二人の巡查も署長に敬礼して出て行

く。

署長「まあ、かけ給え」

署長室には、署長と組長の二人だけ

になり、二人は応接椅子に向き合っ

て座る。

署長「内々の話だが、近々闇物資の手入れを実施する」

組長、にやりと笑って、

組長「貴重なお話を有難うございます。で、解放区でもやるんですかい」

署長「やりたいのは、やまやまだが、進駐軍の連中が、奴らに味方するんでな。・・・

今は、奴らに日本の法律は適用できんだ」

組長は笑って、

組長「そりゃ不平等だ。この民主主義のご

時世に、差別ですよ差別」

署長もにやりと笑って、

署長「そこでだ、少し知恵を使うんだよ」

組長「どのように」

署長「今回の様に、奴らに死人や怪我人が出ても俺たちは動かんが、こちら側に死人が出れば話は別だ。それは、暴動が起きたと言える。暴動ともなれば、奴らを一斉検挙する大義名分ができる。それに進駐軍にも支援要請もできる」

組長「なるほど」

署長「物事には大義名分がいるんだよ。あの暴れたくとうずうずしている連中の使い道を、もう少し考えてみたまえ」

組長「あいつらを、鉄砲玉に使えとおっしゃるんですか」

署長「別に相手の玉を獲れと言ってる訳じゃない。俺達が奴らをしょつ引くだけの大義名分を作ってもらわんとな。お宅の暴れん坊を、俺達がしょつ引いたって、

お互い何のためにもならんだろう」

組長「へい、署長のご意向は良く解りやした」
署長は笑いながら、

署長「早く平和で静かな函館にしようじゃないか。解放区が無くなりゃ、お宅の縄張りも増えるんだろ」

組長「これからも、宜しくお願いいたします」

署長「俺が話したかったのはこれだけだ」

組長は、にやにやしながら立ち上がり、

組長「それでは、これで失礼いたします」

組長は署長に頭を下げて出て行く。

署長は煙草を取り出してゆっくり吸いはじめる。

昭和二十一年一月二十四日

○将太の家 外 夜

半鐘の音が通りに鳴り響く。

久美子が、扉を開けて通りに出て来る。

隣り近所の人達も、何事かと思つて家の外に出てきている。

表通りを、進駐軍のジープやトラックが次々と走つて行く。

闇市の方角の空が赤く見える。

畳屋の爺さんが、表通りから戻つて来る。

久美子が爺さんに近寄つて、

久美子「何か起きたんですか」

爺さん「闇市の方で暴動が起きたらしい」

久美子「暴動？」

爺さん「詳しくは判らんが、第三国人達が暴動起こして、派出所に火をつけたらしい。死人も出てゐるらしいよ」

久美子「まあ怖い、こつちまで来るかしら」
爺さん「こつちまでは広がらないと思うがね、今夜は外に出ないほうがいい。雅恵ちゃんは、家に居るのかい」

久美子「ええ、雅恵も家に居ます」

爺さん「そりゃ安心だ。戸締りして家の中で静かにしてるのが一番だよ」

久美子「そうですね、お休みなさい」

久美子と爺さんは、それぞれ家に入る。

○同 土間 夜

久美子は扉に鍵をかけ、心張棒を差し込む。

○同 居間 夜

久美子は、不安な顔で居間に来る。

将太と雅恵が奥の部屋から居間に来て、

雅恵「何が起きたの」

久美子「闇市の辺りで暴動が起こったんだって。派出所が焼き討ちされたらしいよ」

雅恵が不安な顔で、

雅恵「剛さん、大丈夫かしら」

久美子が顔色を変えて、

久美子「今夜は絶対に外に出ちゃだめよ」

雅恵「行かないわよ、足手纏いになるだけ

だもの」

将太「闇市、無くなっちゃうのかな」

久美子「無くなりやしないよ」

将太と雅恵は奥の部屋に戻る。

久美子は居間で裁縫仕事を始める。

○街路

真つ青な青空である。

経を唱える僧侶を先頭に葬列が来る。

僧侶の後に、剛の母が遺骨を抱いて続く。

その後ろに、羽織袴姿の福田組の組長と福田組の半纏を着た若い衆が数人続く。

その後ろから、憔悴した雅恵が久美子に支えられ、よろよろ歩いて行く。

久美子も雅恵も喪服を着ている。

葬列が通り過ぎるのを、将太が家影から一人でじつと見ている。

ナレーション（将太の声）

「剛さんが死んだ。闇市の暴動で解放区の連中に殺されたんだ」

将太は、葬列が見えなくなると走り出す。

○辰次の家

将太が駆けて来て、勝手口から中を覗く。

奥の部屋に辰次の姿が見えない。

将太は、家の奥に向かって声をかける。

将太「辰ちゃん」

家の奥から男の声で、

辰次の父親の声「辰次、誰か来たぞ」

辰次が奥から出て来る。

辰次「今日はいけん」

将太「なんで」

辰次「父ちゃん帰って来た」

将太は黙って踵を返すと走り出す。

○波止場の栈橋

将太が栈橋の上を駆けて来る。

将太は栈橋の上に大の字に寝転んで空を見上げる。

真つ青な空が広がり、飛行機が一機飛んで行く。

将太は、暫く飛行機を眺めている。

将太の目に涙が滲む。

将太は、じつとして居られなくなり、起き上がり涙を手で拭うと走り出す。

○畦道

将太が一人、俯きかげんに歩いて行く。

田んぼには雪が残っている。

将太は、石ころを思い切り蹴飛ばす。

将太は走り出す。

○沼

枯れた藪の中から、藪を掻き分けて

将太が出て来る。

沼の真ん中には薄く氷が張っている。

将太は、沼の畔にある釣り糸を結び

付けた木の所に来る。

一本の釣り糸が、ピンと張って沼の中に延び、左右に動いている。

将太はその糸をつかんで、引いてみる。

糸の先の沼の水が波打つ。

将太は、力一杯糸を手繰る。

大物が掛かっている。

糸先が左右に動き回り、なかなか糸が手繰れない。

将太は、全力で糸を手繰る。

魚は暴れて、薄く張った氷を割りながら水面に顔をだす。

将太は、必死に糸を手繰る。

七十センチはある大きなナマズが釣り上がる。

ナマズは、土の上で跳ね回り、将太

は石を拾って、ナマズの頭を石で何
度も叩く。

ナマズはおとなしくなり、将太は座
り込んで大きく息を吐く。

沼は何事も無かったかの様に、静ま
りかえっている。

○留蔵の家 土間

留蔵が、ブリキ細工の仕事をしてい
る。

大ナマズを抱えて将太が入って来る。

留蔵が将太に気付いて、

留蔵「どうした、今日は一人か」

将太は留蔵の所にナマズを持って来
て差し出し、

将太「おじさんに、やる」

留蔵「随分大きなナマズだな。相棒と食べ
るつもりで釣ったんだろ」

将太は黙って突っ立っている。

留蔵「何かあったのか」

将太「・・・」

留蔵「よし、俺が捌いてやろう。蒲焼にし
たら旨いぞ。蒲焼にしてやるから、相棒
にも持って帰ってやれ」

留蔵は立ち上がってナマズを受け取
り、

留蔵「そこに七輪と炭があるから、お前は
火を起こせ。その位はできるだろ」

留蔵はナマズを持って台所に行く。

将太は土間の隅に置いてあった七輪
を引っ張り出して来て、炭を詰める。

○同 台所

留蔵がナマズを捌いている。

将太が来て、

将太「おじさん、マツチ」

留蔵は、マツチと新聞紙を将太に渡して、

留蔵「新聞紙を突っ込んで、火を付けるんだ」

将太は、マツチと新聞紙を受け取ると走って土間に戻る。

○同 土間

将太は新聞紙を七輪に詰めて火を付けるが、なかなか炭にまで火が付かない。

何度も試みて、漸く炭にまで火が付く。

留蔵が、タレに浸けたナマズの切り身を大きな皿に載せて持つてくる。

留蔵「こいつは油がのつて、旨そうだ」

留蔵は、七輪の上に網を載せて、ナマズの切り身を並べる。

ジュワという音と共に、蒲焼の香ばしい匂いが土間中に広がる。

留蔵と将太は、七輪を挟んで向き合って椅子に座り、蒲焼の焼けるのを見ている。

留蔵「お前、名前は？」

将太「将太」

留蔵「いつも一緒の相棒は？」

将太「辰次」

留蔵「今日は辰次はどうした、喧嘩でもしたのか？」

将太は首を横に振り、

将太「父ちゃんが帰って来た」

留蔵「辰次の父ちゃんが帰って来たのか」

将太は首を縦に振る。

留蔵「戦争からか？」

将太は首を縦に振る。

留蔵「将太の父ちゃんは？」

将太「帽子だけ先に帰って来た」

留蔵「帽子だけ先に帰って来た？」

将太「一緒に船に乗ってた人が届けに来た」

留蔵「将太の父ちゃんは船乗りか。船は沈

んじまったのか？」

将太「そうらしい」

留蔵は、網の上の切り身を取っては

タレに浸けて、また網の上に載せる。

将太が、ぼそつと言う。

将太「父ちゃんは、泳ぎがすごく上手いから、

海では死なない」

留蔵「母ちゃんはどうしてる」

将太「毎日仕立ての仕事してる」

留蔵「母ちゃんは、何て言ってる」

将太「父ちゃんの事か、・・・母ちゃんが言

ったんだ、帽子が先に帰って来たけど、

そのうち父ちゃん帰って来るって」

留蔵「母ちゃんがそう言ってたか」

将太は俯いて、ぼそつと言う。

将太「でも母ちゃん、夜中に泣いてた」

将太は涙ぐんでいる。

留蔵は、焼けた蒲焼を皿に取って将

太に差し出し、

留蔵「ほら、食ってみろ、旨いぞ」

将太は、ナマズの蒲焼にかぶりつく。

留蔵「旨いだろ、自分で釣った魚は特に旨

いはずだ。食いたいだけ食え」

将太「おじさんは食べないんか」

留蔵「折角だから一切れもらうよ。残りは、

辰次と母ちゃんに持って行ってやれ」

将太は、黙々と蒲焼に食らいつく。

留蔵も蒲焼を食べて、

留蔵「確かにこれは旨い。将太のお蔭で久

しぶりに旨い物にありつけた」

留蔵は、次々に切り身を網にのせる。

留蔵「兄弟はいるのか」

将太「姉ちゃんがいる」

留蔵「姉ちゃんはどうしてる」

将太「今日は、許嫁の葬式だ」

留蔵「戦死か」

将太「戦争からは帰って来たけど、この間

の暴動で殺された」

留蔵「折角生きて帰って来たのに、暴動で

死んだのか・・・」

将太「剛さんは、零戦に乗ってたんだ」

留蔵「そうか、飛行機乗りか」

将太「もう兵隊さんにはなれないんだよね」

留蔵「兵隊になりたかったのか？」

将太「うん、零戦で空を飛びたかった」

留蔵「もう、戦争は終わったんだ・・・俺

も中国まで連れてかれて戦争してきたが、

足を撃ち抜かれてそれで終わりだ。この

身体では、畑仕事はもうできん」

留蔵は、焼けた蒲焼を将太の皿にの

せてやる。

将太は次々と蒲焼に食らいつく。

留蔵「Boys be Ambitious 少年よ大志を抱け、

この言葉聞いた事有るか」

将太は首を横に振る。

将太「それ、敵国語だろ」

留蔵「アメリカ人の北海道大学の有名な先生の言葉だ。少年は、大きな志を持ちなさいっていう意味だ」

将太「日本の学校にアメリカ人の先生が居たのか」

留蔵「そうだ、戦争をする前は、日本とアメリカは仲良くしてたんだ」

将太「ふーん」

留蔵「お前はこれからまだ何十年も生きるんだ、これから何でもできる。兵隊がだめなら、何になる？」

将太「商売をする。闇市のおじさん達は、皆沢山お金持つてる。俺も闇市で商売し

たい」

留蔵「お金を稼いでどうするんだ」

将太「腹一杯、食いたい物を食う」

留蔵は大きな声で笑い、

留蔵「食いたい物を腹一杯食うためか・・・お金持ちになるんなら、日本一の大金持ちになれよ」

留蔵は、笑いながら焼けた蒲焼を将太の皿にのせ、

留蔵「さあ、どんどん食え。闇市の残飯シチューより、自分で釣った魚は、ずっと旨いだろ」

将太は口に蒲焼を頬張ったまま頷く。

留蔵は、積んである空き缶を取ってきて、網の上に残った蒲焼を空き缶の中に並べ、上からタレをかける。

留蔵は、仕事場の棚の箱からブリキ

のジープの完成品を一台取り出して、

将太に差し出し、

留蔵「これは、ナマズの礼だ」

将太は嬉しそうにジープを受け取って、

将太「これ、もらっているのか」

留蔵「お前たちが集めてくれた空き缶で作った。辰次にも、今度来た時にやると伝えてくれ」

将太は、嬉しそうにジープを弄っている。

留蔵が大きな声で、

留蔵「挨拶は」

将太は慌てて立ち上がり、軍隊式に大きな声で、

将太「有難うございます」

将太は頭を深々と下げる。

留蔵は、それを見て大笑いし、蒲焼の入った缶を指さして、

留蔵「これも忘れるな。持って帰って皆に食わしてやれよ」

将太は、直立したまま、大声で答える。

将太「はい」

留蔵「少しは元気が出たようだな。片付けはいいから、満腹になったらそろそろ帰れ」

将太はジープをポケットにねじ込み、蒲焼の入った缶を抱えると、

将太「ごちそうさまでした」

将太は、もう一度留蔵に頭を下げ出て行く。

留蔵は笑いながら、将太の後姿を見送る。

○畦道

夕焼け空の下、将太が缶を大事そうに抱えて歩いて行く。

平成二十七年八月十五日 函館

○将太の家 書斎 夕暮れ時

立派な書斎。

壁の作り付けの本棚には、沢山の本がぎっしり並んでいる。

大きな窓からは、眼下に薄暮の函館港が一望できる。

大きな机の上には新聞が広げられて

いて、将太（八十歳）が天眼鏡で新聞を読んでいる。

新聞の大見出しは『七十回目の終戦記念日』。

将太は、新聞を畳むと机の上の飾り棚に飾ってあった、古びて錆びたブリキ製のジープのおもちゃを手に取って、感慨深げに眺める。

孫の祐太が、手に新幹線のおもちゃを持って書斎に入ってくる。

祐太「爺ちゃん、ご飯だよ」

将太は振り返って、

将太「もうご飯かい。佑ちゃんそれ何だい、いい物持ってるねえ」

祐太は、新幹線のおもちゃを自慢げに将太に見せて、

祐太「しんかんせん。もうすぐ函館にも来るんだよ」

将太「そうかい、新幹線かい」

将太は、手にしていたブリキのジープを祐太に見せる。

祐太「それな」

将太「これは爺ちゃんの宝物だよ。その新幹線と取り替えっこしようか」

祐太は慌てて手に持った新幹線のおもちゃを引っ込めて、

祐太「やだよ、そんな古くて汚いの」

将太「古くて汚いか・・・そうだな」

将太は笑いながら、ブリキのジープを机の上の飾り棚に戻す。

祐太「爺ちゃん、早く行こう」

祐太は、将太の手を引く張る。

将太「ああ行くよ」

将太はゆっくり立ち上がり、祐太に手を引かれて、書斎を出て行く。

終わり

本電子書籍は、2015 年 12 月 4 日発行の『第 21 回函館港イルミネーション映画祭 2015 第 19 回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第 21 回函館港イルミネーション映画祭 2015
第 19 回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

ブリキのジープ

作：太田 野歩

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2016 年 2 月 1 日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒 040-0055 函館市末広町 4 番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒 040-0051 函館市弁天町 4 番 8 号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
